

令和二年度

小論文

(60分)

教育学部 児童幼児教育学科

解答はすべて解答用紙に記入すること

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題用紙を開かないこと。
- 二、問題用紙は、表紙を含めて三ページである。
- 三、解答用紙は、一枚である。解答は縦書きにすること。
- 四、受験番号・氏名は、監督者の指示に従って記入すること。
- 五、問題用紙の余白等は適宜使用してよい。

問題

教育学部 児童幼児教育学科

次の文章と表の調査結果をふまえて以下の問いに答えなさい。

子供たちの間に学力の格差があること、すなわちできる子・できない子のバラツキが大きくなることも、そもそもなぜ問題なのか——そういう単純な問いから始めてみよう。

学力格差を問題と見なすことは、第一に、「平等」という価値に関わっている。

(中略)

生まれつきの潜在能力の差はもしかしたらあるのかもしれないが、一人ひとりの遺伝子を調べてそれに応じた処遇をしようなどというSF的な話以外では、それは計測不能である。一方、生育環境や教育条件のうえでの差異は、観察可能だし、介入可能である。ある子の学力が低いのは、相対的に恵まれない環境や条件のせいかもしれない。

わずか一〇歳や一五歳の子供たちの間に、もしいはなほだしい学力のバラツキが見られるとすると、その社会は、バラツキが相対的に小さい社会に比べて、子供たちが置かれた環境や条件に関して不平等が存在していることを意味している。

もしわれわれが「平等」という価値を重視するならば、「生まれつきの潜在能力」を決めつけてしまわないで、人生の初期に見られる差異が、社会や教育の環境や条件によって不当に広がってしまったら、少なくともある年齢段階までは配慮することが必要である。平等な社会では、若い時期のチャンスはできるだけ公平・平等に配分されるべきだからである。そうだとすると、小学校や中学校で「学力格差」が広がるのは、望ましいことではない。

第二に、「学力格差」の問題は、現代人の職業的な人生設計と関わっている。かつては長い間、「百姓に学問は不要」などといわれる時代が続いていた。生計のためのスキルが、文字の学習を通してではなく、実際の労働を通して習い覚えられた生き方だった。そこにおいては、学校の「学力」は大した意味をもたなかった。学校で褒められる子と村で褒められる子が違うのは、高度成長期以前にはごく当たり前のことであった。

ところが、高度成長期をへて、ほとんどの青少年が「勤め人」になる時代になった。「学力」を身に付け、「学歴」を手にして、それによって入職先が決まっていく仕組みになった。だから、昔のように「学校の勉強は人生に関係ない」などといえない時代になっているのである。

学んだ内容がどうかという以前に、まずは「学歴」による職業機会の配分という意味合いが強い。しかし同時に、学校で学んだことが役立つのは入職時の「学歴」だけではない。現代は、不断に技術革新が進んでいる。組織内労働は、ローテーションや昇進システムをともなっている。だから、常に新しいことを学び続けなければならない。穴掘りや資材運びの仕事に就いた者も、いずれは安全管理などの資格を取ったり、書類書きに従事したりするのだ。特に、IT化が進むこれからの時代は、情報処理能力が誰にも必要になってきている(筒井・二〇〇六、二〇〇八)。文字の学習を通して身に付くものを一生使いまわしていくことになるのだ——だから、どの子も、一定程度の基礎的な学力を身に付けておかないといけない。格差が広がって「学力」が身に付いていない若者が、不安定な底辺労働市場に大量に溜まってしまつと、当人たちも社会も困るのだ。

第三に、学力の大きな格差は、民主主義を危うくしてしまう。民主主義は、一人ひとりが自律的な政治の主体であることによって成り立つものである。理性的な討議への参加能力や賢明な判断力が、できるだけ多くの人に求められるのだ。

表 親の子どもへの接し方と子どもの学力の関係

「とてもあてはまる」と「まあ、あてはまる」の合計 (%)	国語 A			国語 B			算数 A			算数 B		
	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)	A層	D層	差(A-D)
子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした	83.0	61.8	21.2	82.9	62.6	20.3	80.7	65.8	14.9	80.9	62.4	18.5
博物館や美術館に連れて行く	38.0	21.7	16.3	37.5	20.7	16.8	36.0	21.6	14.4	37.7	21.8	15.9
ほとんど毎日、子どもに「勉強しなさい」という	42.4	51.8	-9.4	41.6	53.0	-11.4	46.4	47.1	-0.7	43.7	50.1	-6.4
子どもの勉強をみて教えている	49.1	48.3	0.8	49.2	47.8	1.4	49.9	48.4	1.5	49.2	48.5	0.7
子どもに一日の出来事を聞く	87.3	83.0	4.3	87.4	80.3	7.1	87.0	84.4	2.6	85.8	83.9	1.9
子どもを決まった時間に寝かすようにしている	81.5	69.8	11.7	80.4	72.7	7.7	81.3	71.2	10.1	80.8	71.6	9.2
ニュースや新聞記事について子どもと話す	82.7	62.7	20.0	82.4	64.3	18.1	81.7	64.8	16.9	81.4	65.0	16.4
家には、本（マンガや雑誌を除く）がたくさんある	73.1	45.0	28.1	71.7	45.8	25.9	70.3	50.4	19.9	69.5	46.9	22.6
子どもがいつもお手伝いをする家事がある	62.4	62.4	0.0	61.2	61.5	-0.3	61.1	63.1	-2.0	62.1	60.3	1.8
テレビゲームで遊ぶ時間は限定している	68.1	51.6	16.5	67.3	52.6	14.7	68.9	51.5	17.4	67.8	53.8	14.0
家で子どもと食事をするときはテレビを見ない	33.3	22.0	11.3	33.9	22.9	11.0	31.9	23.5	8.4	32.5	23.7	8.8
親が言わなくても子どもは自分から勉強している	78.4	53.6	24.8	78.6	52.5	26.1	77.1	56.4	20.7	77.1	54.6	22.5
身のまわりのことは子どもが一人でできている	86.5	77.1	9.4	86.8	75.5	11.3	84.9	79.7	5.2	85.9	77.3	8.6
子どもが英語や外国の文化に触れるよう意識している	66.3	43.0	23.3	66.3	43.2	23.1	67.8	44.4	23.4	65.6	45.5	20.1
子どもにいろいろな体験の機会をつくるよう意識している	89.7	80.8	8.9	89.6	81.5	8.1	89.5	80.7	8.8	89.3	80.6	8.7
以前のように、土曜日でも学校で授業をしてほしい	62.9	71.9	-9.0	62.2	74.2	-12.0	62.0	71.5	-9.5	61.5	70.7	-9.2

※「お茶の水女子大学委託研究・補完調査について（2009）」の「家庭背景と子どもの学力等の関係（案）」より作成。

※調査対象は、公立学校第6学年の児童の担任教員および保護者（質問紙調査）である。

※調査種別回収状況としては、保護者調査における児童数は8,093名のうち有効回収率は72.2%、教員調査における学級数は256であり、有効回収率は、95.3%であった。

※国語A・算数Aは、主として「知識」に関する問題、国語B・算数Bは、主として「活用」に関する問題である。

問一 表は、子どもを学力水準別にA層（最も学力が高い層）からD層（最も学力が低い層）にまで四分し、そ

の中のA層とD層の比較をして、保護者の子どもへの接し方や教育意識を見た調査結果である。

表から、子どもの学力向上に効果的だと言える親の接し方について、一〇〇〇字以内で答えなさい。

問二 文章を要約し、表の調査結果を参考にしながらあなたの考えを四〇〇〇字以内で述べなさい。